

多様性を認め「明治はひとつ」

校友会の2016年度定時代議員総会が7月31日、駿河台キャンパス・リバティホールで開催された。同総会での向殿政男校友会会長、柳谷孝理事長、土屋恵一郎学長のあいさつを抜粋してここに紹介する。



校友会会長 向殿 政男



理事長 柳谷 孝



学 長 土屋 恵一郎

皆さま、おはようございます。全国津々浦々、韓国、台湾からご出席賜り誠にありがとうございます。天気も良好で、白雲なびく駿河台にお集まりいただき、心より感謝申し上げます。

先日、30年前に卒業した教え子と会う機会があり、「明治大学を卒業してよかった」と言っていました。いい会社に入り、いい仕事ができる。これは母校の教育のおかげです。

次に、「明治大学がこれだけ素晴らしいことは、私の誇りです」と言っていました。卒業生として、母校を誇りに思う。こんな幸せなことはありません。これまで大学の教育・研究に携わられた大学関係者、現役学生、そして校友の皆さま方のご尽力が、ここにつながっています。

校友会は、母校を支援し、それを通して親睦を深める。校友はもとより、大学の教職員、父母会、現役学生、全員が一体となり、互いの多様性を認め合い切磋琢磨していきたいという願いがあります。力をひとつにして支援することが、私が掲げるスローガン「明治はひとつ」です。

校友会各県支部総会には、「明るく、楽しく、前向きに」をモットーに、出席させていただいております。私の好きな言葉に「不易流行」があります。大学の建学の精神、これは決して変えてはなりません。それを胸に、魂として、時代に対応していく。その成果が、現在に至ります。しかし、そのまま将来を約束することはできません。今後、いかに我々は建学の精神を胸に対応していくかということが重要です。

現在、校友会ではいくつかの課題に取り組んでいます。1つは「紫紺NET」です。全世界にネットワークをつなぎ、情報共有をする。もう1つは、「クラスター」です。校友会も非常に大きな縦割りの組織ですが、その他、たくさん活躍しているOBや同窓会の集まりがあります。それらを表に出し、見える化させることで、明治大学全体をバックアップする組織体系を構築し、その中心を校友会が担っていきたく考えています。

昨年、校友会では明治大学を全国型大学にするために、地方出身の学生を支援する「つなげ！紫紺の「たすき」奨学金をはじめました。この基金を校友が寄付として集め、大学の教育・研究の資金とし、寄付文化を根付かせていきたいと考えています。母校を支援する大事な財政的な柱と基盤を校友会が支え、大学をいかに支援していくか。そのために我々は何ができるか、どういう恩を返せるか、そういった視点で皆さまと手を結び取り組んで参ります。本日は、よろしくお願いたします。

建学の精神を胸に母校を支える

本日は、日本全国、そして海外の支部から大勢の皆さまにご出席をいただき、誠にありがとうございます。また、日頃より本学に多大なるご支援を賜りまして、厚く御礼申し上げます。

さて、本年5月10日に新理事会がスタートいたしました。その直後から、本学が直面している喫緊の様々な重要課題について、理事一同で情報共有を図り、精力的に検討を重ねております。入学定員管理の厳格化に伴う学費収入の減少、老朽化した施設設備の修繕など、教育・研究活動の基盤となる財政に大きな影響を及ぼす課題も抱えております。こうした懸案事項を慎重に検討し、大学全体を俯瞰し、優先順位を見極めてメリハリをつけて対応を図り、山積した諸課題の解決に全力で取り組んでいきたいと考えております。

数日前に、厚生労働省から最新の日本の平均寿命が発表され、男性が80.79歳、女性が87.05歳と最高記録を更新したそうです。また平均寿命とともに、2015年に生まれた子供のうち、男性の4人に1人、女性の2人に1人は、90歳以上まで生きられるであろうということも発表しています。このことは、2100年を超え、22世紀に生きる世代が誕生していることを意味しています。その22世紀に、明治大学が引き続きトップユニバーシティとして輝き続けているか。新理事会は、後の歴史に問われる重要な地点に、いま立っているものと理解しております。

そのような状況では、新理事会だけでなく、学生・教職員そして校友・父母の皆さまが同じ船に乗って、共に手を携えながら力を出し合い前進させていくことが必要だと考えています。船を動かすためには、目的地を定め、進むべき方向や途中に立ち寄る港も決めていく必要があります。そして、出港したらどの程度のスピードにするか、天候や潮目も見極めながら、取舵をとるのか面舵いっぱいにするのか判断する必要があります。加えて、進めていく中で燃料や食料が足りているかをチェックすることも大切です。私は、ここにいる校友の皆さまも同じ船(Same boat)に乗っているものと思っております。どうか皆さま、明治大学を更に発展させるため、Same boatで共に進んでいこうではありませんか。

結びに、向殿校友会会長をはじめ、校友会の皆さまのご繁栄をお祈りし、本日の代議員総会の議事が円滑に進められますことを祈念いたしまして、甚だ簡単ではございますが、私のあいさつとさせていただきます。

共に手を携え、力を出し合い前進

私は世阿弥の「風姿花伝」に関する本を書いています。世阿弥は伝統芸術の能楽の祖ですが、自身の劇団の存続のために、様々な革新を起こしています。その世阿弥が残している言葉の中に「住する所なきを、まず花と知るべし」という言葉があります。住する所なきというのは、そこに留まらないということ、要は安住しないことこそ花であると世阿弥は言っているのです。人は成功すると守りに入り、安定を目指してしまうことがあります。しかし、その成功に縋り、変化を恐れていると、必ず衰退してしまうのです。「珍しきが花」、つまり変化の中で新しさを作っていくことが、人気を保つ秘訣であると世阿弥は言っています。

これは大学も一緒です。明治大学は今年で135周年を迎えました。150周年に向けて、本学は今後も一定のポジションを保つことはできるでしょう。しかし、先進的の大学として存続していくためには、常に新しいことに挑戦し変化していくことが必要なのです。この変化と革新なくして本学が学生たちのプライドとなるトップスクールになることは不可能です。

その一つとして、2008年に国際日本学部、13年に総合数理学部を設立しました。いずれも新キャンパスである中野で先進的な教育研究を展開しています。総合数理学部は今年度、一期生が卒業しますが、就職状況も大変良いと聞いています。同学部は実は日本で初めての数学系学部です。歴史と伝統を持つ本学が、日本初の学部を作るといえるのは、大きなインパクトがありました。

こうした先進的研究を支え、さらに大学全体の教育研究環境を大規模に革新していくためには、多くの資金が必要です。かつて文学部の教授であった小野二郎さんは、芸術が国の援助に頼ることなく自立した活力を持つためには、芸術を支える支援集団が必要であると言ったことがあります。大学も同じです。大学を支える支援集団があつてこそ、国に頼ることなく、活力ある研究を進めることができます。その集団こそ校友会です。大学が前進していくためには、校友との緊密な関係が不可欠です。例えば、アメリカの大学の多くが実施している「レガシー入学制度」といった校友子弟の推薦入学制度を、日本でも可能な方法を検討して導入したいと考えています。自立した財政基盤を確立するため、校友からの支援を受けとめる新たな方法を検討していきます。

本学は、これからもフロンティアであり続けるために、そしてアジアのリーディング・ユニバーシティとなるべく、変化を恐れず前進し続けます。この前進を支える支援集団こそ、皆さんののです。

常に新しいことに挑戦し革新する